

《大島_男木島 Inter-Island Timescapes》 山川冬樹 × 村山悟郎

島のほぼ全体がハンセン病療養所となっている大島では、かつて隔離から逃れ海を泳いで逃走しようとする者が後をたたなかつたという。山川冬樹の『海峡の歌』(2019)では、人間が自由を求めて生きながらえようとする、その切実な生の在り方がモチーフとなっていた。他方、瀬戸内一帯には野生のイノシシたちが生息しているが、しばしば島から島へ海を泳いでわたる様子が目撃されている。もしかすると身命を賭しても自由を求めて生きようとする本能において、野生のイノシシたちと私たち人間は根底で響き合っているのかも知れない。

大島と男木島は直線距離で約4キロ離れている。両者は隣りあいながらも海で隔てられ、それぞれ異なる時間、文化、歴史と記憶、そして未来を持っている。山川と村山はこれら二つの島と島の間=Inter-Islandに存在する差異と隔たりに文字通り向き合いながら、そこに生起するものに賭け、海を越える二頭の”イノシシ”となって交信を試みる。

Timescapes (時間の風景)

島には特有の地勢があり、固有の時間性があらわれる。男木島では、戦後の引き揚げによって興隆した昭和の街並みが今もそのまま残っている。豊玉姫神社を中心にして山の斜面に集落をなし、迷宮のように細道が入り組んで、まるで開発を阻むかのようだ。野放しの廃屋には、たくましく植物が生い茂って、島全体がタイムカプセルのように時の流れを留めている。また、芸術祭の影響もあって移住者も少しずつ増えはじめており、2014年には男木小中学校が再開するなど、新たな世代も育まれつつある。

一方、大島は明治42年に「第四区療養所」が設置されて以来、島のほぼ全体が国立病療養所大島青松園となっている。「らい予防法」が平成8年に廃止されて以降、現在も38人の入所者が暮らしているが、島では子をもうけることが許されなかつたため、記憶の継承と将来構想が大きな課題となっている。大島は重い歴史を宿す島でありながら、島内に漂う空気はカラッと爽やかで、中央に広がる平地には真新しい施設が建ち並び、公園のように隅々まで手入れが行き届いている。それは過去を消し去りながら環境が日々更新されているかのようで、男木島の”昭和”を留めるタイムカプセル性とは対照的である。しかし一見人工的に見える大島の風景は、島に隔離を強いられた者らが処遇改善を求め、長年の闘いの末に国から勝ち取つた「時間の風景」であることを忘れてはならない。このように島の景観一つをとっても、男木島と大島に流れてきた歴史的時間の差異を見てとることができる。

また日常的にそれぞれの島と四国本土とを結ぶ定期船の存在は、時刻によって厳密に規定された時間感覚を島にもたらしている。時間に追われながら芸術祭を鑑賞する者は、島民や入所者らとはまた異なつた時間感覚を生きることになる。船の定期的な往来は寄せては返す人流をつくり、島のバイオリズムの一部を成す。島の静寂に耳を澄ませば、穏やかなサウンドスケープのなかに、活発な島社会の律動を感じることができるだろう。

さらには両島に流れるそれぞれの時間を一つの大きな時の流れが包み込むように、日の出・日の入りのサイクルや、気候や気象変動のダイナミズム、天体の動きに伴つて生じる潮の満ち引きが関わっている。島の漁師たちは瀬戸内海の急激な干満差に自らの生活をカップリングさせながら仕

事をするだろう。太陽光は空間に色や温度といった情態をつくりだし、朝もやから夜の闇へと至るその緩やかな変化もまた、主観的な気分の変化を連れだって特有の時間感覚をつくりだすだろう。

このように島の固有な時間とは、歴史の顕れとしての景観はもちろんのこと、時計によって示される近代的時刻（クロノス）や社会的情態（ノモス）としての音景だけではなく、自然のマクロなりズム（ピュシス）や、主観的な情動の変化率（カイロス）など、様々な時間の様相がポリリズム的に混成してあらわれている。

山川と村山は大島と男木島で固有に生成されるこれらの多元的な時間を、己の身体で媒介しながら結び合せ、アンサンブルを奏でるようにパフォーマンスやドローイングを重ねていくことで、島と島の間に生起するTimescapes=時間の風景を描き出す。